

なかはんにやきたうら

中般若北浦遺跡(本発掘調査B)

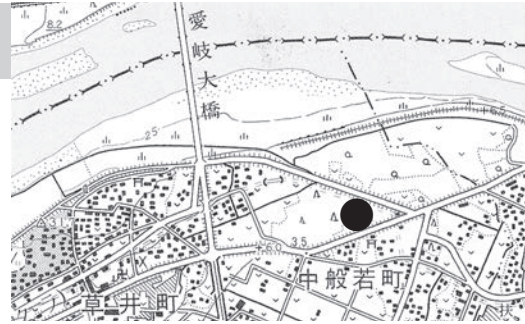
所在地 江南市中般若北浦地内
(北緯35度37分28秒 東経136度89分25秒)

調査理由 木曽川江南防災拠点整備事業

調査期間 令和5年9月～令和6年1月

調査面積 2,000㎡

担当者 武部真木・梶田真由



調査地点 (1/2.5万「犬山」)

調査の経過 調査は、国土交通省中部地方整備局木曽川上流河川事務所による木曽川江南防災拠点整備事業に伴うものであり、愛知県県民文化局を通じた委託事業として、令和5年9月から令和6年1月にかけて実施した。調査面積は、2000㎡である。

立地と環境 遺跡は、愛知県の北部、江南市の北東の端、扶桑町との市境に位置している。木曽川の左岸に立地し慶長13年に築堤が開始された御囲堤の北側に位置している。周辺には郷前遺跡や宮山遺跡など中世の遺物の散布地が所在している。今年度は、調査区を南北にA、B区の2区に分割し調査を行なった。

調査の概要 御囲堤に近い南側のA区と木曽川に近いB区では様相がやや違っていた。A区は流路(080NR、220NR)に挟まれておりその間が浅い凹地や微高地となっており、B区は、調査区の広範囲に流路と河原石が広がる。A・B区の東側は攪乱である。両区から中世の遺構・遺物が確認された。遺物は12世紀から16世紀のものがみつかった。

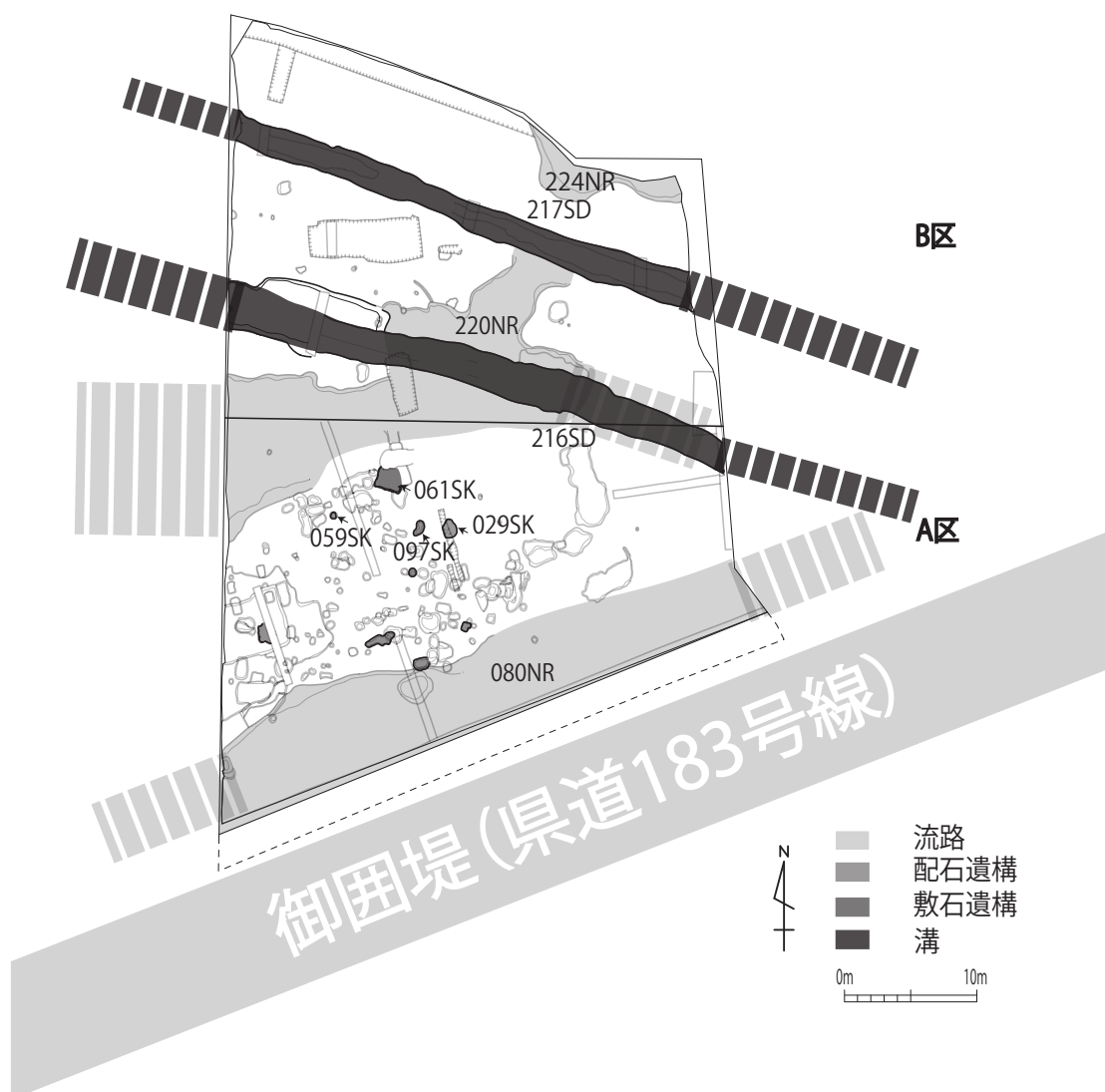
遺構は、A区の微高地ではまとまって土坑が確認され方形、円形、楕円をしており、大きさとしては、1mを超えるような大きな遺構は少ない。また、周辺の河原から選択し、人為的に礫を配置した遺構も複数確認できた。主な遺構は、A区の敷石遺構(061SK)は、1.3×2.5mの範囲に扁平な礫が20個以上並べられている。礫の大きさは、ほぼ同じで20cm～30cm程度で、礫を除去した面は平坦であった。配石遺構(029SK)は、直径1.2mの円形の土坑として見つかり中央が少し凹んだ径40cmの扁平な円礫が中央に据えられ周囲は円礫で支えられている。他にも大型の扁平な円礫が1個置かれている遺構(059SK、097SK)などがある。

B区は溝以外の遺構はほとんど検出することができなかったが、直線的に並行した延びる大型の溝(216SD・217SD)が検出された。調査区のほぼ中央にある216SDは、深さ2.2m、幅2.8m、検出長20m以上である。10m北側で並行に延びる217SDは、深さ1.5m、幅2.3m、検出長20m以上ある。

遺物は、両区から山茶碗(東濃型)、天目茶碗、播鉢などが出土した。A区の敷石遺構の近くで金属製品や古銭が出土し、B区の溝(216SD)の黒褐色の層から青磁皿、灰釉や鉄釉の皿、土師質鍋、茶臼(下臼)、のほか、灰釉四耳壺や常滑窯産の壺、中国産の青磁短頸壺などの陶磁器が出土している。

まとめ 今回の調査では遺構・遺物に生活感が乏しく、建物が立ちにくい立地であることと、蔵骨器と思われる陶磁器や古銭などの金属製品も出土していることから墓域としての可能性が考えられる。溝2条の性格は不明であるが軸線方向は、新堤と同じ向きであった。

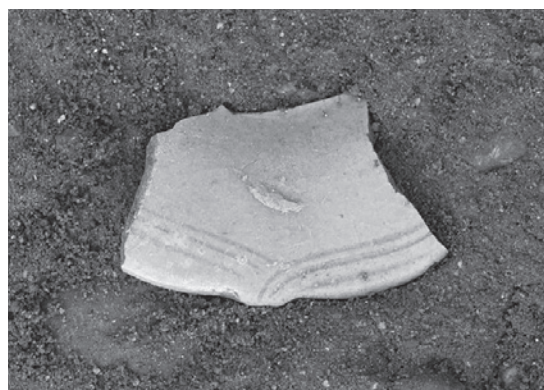
(梶田真由)



主要遺構配置図(S=1/400)



061SK 配石遺構 (北から)



216SD 青磁皿出土状況 (西から)